

私の保育



矢幡 文子

一年前の今頃は、保母になることを夢見ていた私も今ではその夢もかない新任保母として夢中で毎日を送り、早くも一年を過ぎようとしている時期が来てしまいました。

まだまだ人一倍の失敗と反省をくり返す毎日ですが、ふり返ると種々な行事を通じ、春夏秋冬を心から味わえたと共に、目的を持ち考えることを欠かせない日々は、空白の時間というものがあまりなかった様に思えます。

私の園では、自由保育が行なわれています。最初、自由保育とは一体どのようにしてゆけばよいのだろうかと不安が一杯でした。なぜならば、学生時代に実習させていただいた園は全て、一斉保育の型をとっていたからです。その頃、自由遊びと言えば、発散

・息ぬきの時間となり、子どもを育てる一番の場は、綿密な計画を立てて行なう一斉の時間であると思っていました。ですから、一日中自由となるとどうなるのだろうか、と考えたわけです。

しかし、いろいろ見比べ考える機会を経た結果、子どもが一番自然な姿で、子どもらしい遊び中心の生活を送るためには、自由保育が必要だと自分で言いきれぬまでになりました。そして、自由保育を行なうには、保母の努力がたいへん要求されることも知りました。ともすれば、放任になってしまうかもしれない、息ぬきなどは許されないものなのだと思われながらしみじみと感じさせられています。

私は、保母になりまず第一に心したことは、子どもの中に飛び込み、子どもの背たけになって話す。「先生、遊ぼう」と言われたら、今やっている仕事を後回しにしても一緒に遊んでやるということでした。これは学生時代に得た心でしたので、右も左もわからない私は、ただ夢中でこのことを実行していました。さて、この結果子どもの反応は、というと五月頃には想像もしていなかった結果となりました。子どもは正直なものだと感じたのもこの頃です。「この先生は、何でも言うことを聞いてくれる。少しぐらいふざけても何も言わないから大丈夫だろう。」とも思ったのでしょうか。私は「子どもになめられている」と感ずる日

々が多くなってきました。本当に、辛く情けないことでした。「なぜだろう。どこがいけないのだろう。学校で学んできたよりにやっていたつもりなのに」私は保母ということばと、回りから「先生」と呼ばれることが重く感じてなりませんでした。

— このような不安は、園内で週二回行なわれる会議が、疑問解決の場となります。会議の時は、「こんなことを質問しておかしくないだろうか」と思えることまでなるべく聞いていただき、アドバイスをしていただく様にしています。この会議を通じて考えてみた時、私は、子どもを叱ることが本当に欠けていた、遠慮していたら絶対によくないものだと感じたのです。「叱る」ということばを使うと、とげがありますがそうではなく、「これではいけない。これはやってほしくない」と思うことがあった時は、ピンツと言う。子どもを保育する以上、悪い所は直してやるという気持ちで、けじめを持った保育をするということであり、私にはこの面が足りず、ことばかけも苦手でした。この悩みを解決するのは頭の中では理解しているつもりでもとても難しいことでした。

私は、園長先生の助手として一クラスを保育させていただいています。夏になり、午睡が始まるとその悩みは一層濃くなりました。遊び盛りの子ども達を静かに寝かすことは、私にとってはたいへんなことだったので。午睡前の運動が足りないというわけ

でもなく同じ条件の下でも、園長先生が一言、言っただけでもなく同じ条件の下でも、私が言っても全然思うようになりませんでしたが、他の行動の中でも同じことが、はっきりと現われるのです。

子どもへのことばかけ、かかわり方など保育をする上での疑問があふれていた時、幸いにみどり会という自由保育を研究し、推進されておられる先生方の講演や公開保育を学ばせていただけの機会を持つことができました。保育の先輩である諸先生方のおことばは、どれをとってみても、私には参考になることばかりで、端から全部書き留めておきたい程でした。ここで学んだ多くのことは、毎日の保育の中で一つずつでも生かしてゆきたいとは思いますが、一体何から始めたらよいのかとまどいました。しかし、未熟な私にとれば、からっぽだった頭の中に、私の保育としたい目的、理想がいくつもできるようでした。

いくつか挙げてみますと、今まで子どもと遊ぶことに懸命だった私、ただ遊ぶことなら誰にでもできます。それではいけないかったです。始終、子どもの中にはいり込んでいたのでは、遊びが散漫になり自分からは遊べない子になってしまいうことに気がつきました。したがって、ある面では適切に指導してゆくことも必要であることを知りました。

私は、なわとびを子ども達とよくやりますが、なわは私が一緒に持たないとうまくいかず、なわとびは「先生がいなくてできない」という状態がその例でした。私が自分達だけでなわを回せるように誘導をしていたらと反省しました。

子どもが砂遊びでおだんご作りをしているとします。「先生、どうぞ」といわれて食べる動作をして「ごちそうさま」これだけでは子どもの中には何も育ちません。そこで一言「クルミ入りでおいしいわ。私はお皿にのせましょう」など、なにかヒントを与え、想像的なことばかけをすることの大切さは、どんな遊びにも共通していえますが、とても難しいことです。一人一人をよく観察しその子を伸ばすには、今どんなことばをかけたらいのか、それともことばはかけない方がよいのか、一斉にやれば全体に共通するねらいを立てるが、自由となるとそれぞれの遊びに適したねらいを頭に入れておくことが必要だと思います。これは、目下勉強中の課題であります。

もし、泣いている子どもがいたら、「どうして泣いているの」と質問をする前に、やさしくさすってやる、抱きしめてやれる気持ちを持つ。危険なことをしたならば、ただ注意するのではなく、危険でないやり方を教えてやりてきたらほめてやること。子どもを認めてやること。私には気づいていなかった大切な部分な

ので、なるべく実行できるよう心がけています。

ただ口で「ああしろ、こうしろ」と言う前に先生自ら動くこと。子どもに遊んでほしければ、遊びやすい環境を整え、おかたづけをやってほしければ、先生が先立ちになり、楽しくやればそのくり返しから子どもも自然にやるようになる。それには、何をどこにかたづけるか、物の位置を整理しておくこと。「子どもは大人の言うようにはならないが、するようになる。」と、よく聞くことばですがその通りだと思います。

先生は、太陽で一人一人の子に光を与えてやる。どの子にも万遍なくかかわること。目立たない子も見落さない。私も早く太陽になりたいと願っています。

以上は、私の尊敬する先生方から吸収したことであり、心の中であらみ合っていることを、並びたててしまいましたが、これらのことは、毎日少しずつでも現場で生かせるよう心に置いていることです。

こう考えると、本当にかめばかむほど味の出る尊い仕事だと感じます。そう感じる反面自分自身の性格、態度に対して、欠けているものが多いことも知りました。私のすることには、なにかいつも頭に「無」ということばがつかます。無関心、無感動、当然声の出るべき所で黙ってみたり、気づくべき所を落したり、人間

としてやって当然のことが、だんだんできなくなってきているようにうす。子どもにいろいろ言えるのは、自分もそれなりにできていなくてはいけないことです。なにをとってみても、私が怠けたり、手をぬくことをしてはよい結果など期待できるわけはありません。

子どもは、大人を小さくしただけのものではないはずですが。痛い時は泣き、困った時は考え、大人には想像もつかない子どもだけの世界を持っています。この時期にどれだけ多くの自然に触れ、遊びこめたかによって将来の人格にも影響してくるもののように思えます。最近、子どもに英語や算数を教えることを進めている園があることをよく耳にしますが、一体子ども達はどんな顔をしてそれを受け入れているのでしょうか。私には大人に満足の気持ちを満たしているだけにしか思えません。小学生になれば、いやでも学んでゆかなければならないことです。今の時期において、遊ぶことの重要性をもっと大切に考えてもらいたいと思うのです。

遊びといえば、子ども達の間で人気のあるかたまりという遊びがあります。あきビンのふたを使い、この園庭のどこにあるのかと思えるほどの細かく、やわらかい砂を入れ、水をたして何度も砂でこすり、表面が輝くほどなめらかにして砂のかたまりを作り

ます。砂まみれになりながら一生懸命にそれを作っている姿を見ると、砂だらけになるからなどの声も出なくなります。でき上がったかたまりを自分の頬にまでつけ、その感触を味わい、大切に袋にいれてもち帰るのです。こんなに細かい砂をどうやって集めるのか見ていると、乾いた砂をかき分け、地べたが見えた細かい砂をたたいてかき集めます。手だけでなく、くつのかかとを使ったりして工夫して遊びこんでいる姿は、寸分のすきもなく、子どもの知恵を見せつけられた思いでした。英語の単語を知っている子より、砂の集め方を知っている子の方が私は好きです。

想えば、私自身も幼い頃これに似たことをして遊んだことがあります。たんぼぼを作ろうと言いながら、毎日あきずにくり返したものでした。時代が変わっても子どもの好む遊びは変わらないと思いました。

出会った子ども一人々々が遊びを通して昨日より今日の方が一歩でも前進するように、これから経験を重ねる中で、自分も鍛えながら、努力することを忘れないでゆきたいと思えます。そして保母と言われて感じた不思議な程、責任を感じさせる重みが少しずつ消えるよう、一日々々大切にがんばってゆきたいものです。